

報徳博物館

友の会

だより
No.2

茨城県真壁郡大和村青木堰 (明治30年代 撮影)

この写真は二宮尊徳が青木村（茨城県真壁郡大和村青木）に築いた堰です。

青木村の復興事業を行うことになった尊徳は、まず田に繁茂していた茅を農民に刈らせ、家屋の屋根を葺き替え、荒地の開墾をさせました。次に、村の北境を流れる桜川に川幅と同じ長さの茅葺き屋根を作って吊し、それを寸時のうちに川底に沈めて土砂を止めるといふ独特な方法で仮普請を行い、その年の水を確保して、農民らの当面の憂いを取り除きました。翌天保4年（1833）に本工事を行い、写真で見られるような堰を築いたのです。この堰はじつに堅固で、弘化2年（1845）と嘉永7年（1854）に改築されただけで、大正7年（1918）まで残っていました。

尊徳は日本土木史上類をみない方法で青木村の農民の憂いを取り除いたもので、この堰普請は彼の農村復興事業のなかでも、きわめて特異な事業であったといえます。

常設展示の中から

2階の常設展示室は、二宮尊徳とその門人の事業や文書・遺品および報徳運動の展開をわかりやすく展示しています。このコーナーでは、その展示品を解説します。

◆茶碗

この茶碗は、尊徳が使用中のものを、門弟の柴田順作（権左衛門・堅節）が駿河に帰郷するときに、ひそかに宇都宮で買った新品の同種茶碗と交換して、記念として持ち帰ったものです。尊徳の体格から想像すると少し小さく感じられます。

順作は尊徳の教えにより一家を復興し、後には杉山報徳社をはじめ駿河東部の報徳社の育成指導に尽力しました。

（県重文4—（14））



◆紙入

尊徳が使用したもので、黒羅紗の二つ折りで、内側は大変カラフルな色合いで幾層にも別れています。外出する時に必要な小間物を入れて携帯する用具で、中に鼻紙・小ようじなどのほか、金銭も入れたりしたようです。

現在のメンズバッグの元祖のようなものです。

（県重文4—（12））



寄贈資料紹介

金次郎像〈茅ヶ崎〉

4月8日(火)に神奈川県茅ヶ崎市共恵の谷川治氏が令妹注子さんと共に持参され、寄贈されたものです。像は、昭和54年に97歳で亡くなった祖田が所有していたとのことです。像の高さは46.8cmで、銘は広秋とあり、箱入りです。



谷川氏の本籍は、新潟県柏崎市清水谷で、先祖は谷川新田を開発しており、苗字の由来になっています。黒姫山の7～8合目あたりで、谷川新田の祠のお祭りを行ない、かつて岩盤を掘って水路（幅40～50cm）を通した遺徳をしのぶそうです。

像の由来は、ご先祖が農村復興事業にとりくんだ二宮尊徳を慕っていた関係から入手され、大版に在住していた大正9年ごろには、すでに所蔵していたとのことです。製作の時期は、明治時代の末から大正時代の始めと思われる。

明治孝節録 全4巻

5月18日(日)に埼玉県鳩ヶ谷市の郷土史研究家岡田博氏から寄贈されたものです。

明治10年6月 宮内省蔵版

昭和11年10月 日本精神振興会復刻

木版本 縦 30.8cm 横 21.3cm

巻一 本文36丁 巻二 本文45丁

巻三 本文67丁 巻四 本文73丁

挟込 紫宸殿での即位式の図一葉47.3cm×63.3cm

◆新着図書

新しい人類文化と報徳 佐々井典比古著(株)報徳文庫 昭和60 104P

茨城県史 通史編3 近世 茨城県史編集委員会編 茨城県 昭和60 925P

心と経済の健康を考える 城宝善太郎編著(財)北海道報徳社 昭和60 24P 編者寄贈

改訂増補 日本老農伝 大西伍一著(社)農山漁村文化協会 昭和60 821P

物語 北海道報徳の歴史 尾崎照夫編(財)北海道報徳社 昭和60 505P 編者寄贈

福沢諭吉と三人の後進たち 西川俊作著 日本評論社 昭和60 181P (エコノブックス9)

ドキュメンタリー

映画撮影スタート

4月17日(木)から19日(土)にかけて、尊徳生誕200年祭の事業の一つであるドキュメンタリー映画の撮影が、神奈川ニュース協会によって、まず相馬市と桜町陣屋から着手されました。

参加者は、小笠原清監督を始め神奈川ニュース協会の田中雅夫事務局長、鈴木正美演出部長、細井カメラマン、伊藤カメラ助手、長崎運転手のほか、報徳会館の大貫信二職員、本館石井学芸員でした。

17日(木)の夕刻、相馬市岩ノ子の旅館に現地集合して、相馬報徳会長桜井弘佑氏とミーティングをしました。18日(金)は、午前中から桜井氏と相馬市立博物館名取重信氏の道案内で、市内富沢字焼切の満水御神水の祭礼を撮影しました。内

容は、新堤池畔の頌徳碑に並べて報徳道歌と満水御満水の絵の軸装二幅がかげ、この前で感謝のおまいりをしてから、むしろの上で村民持ちよりの酒、甘酒、お重の菜などをひろげて、宴を張るものです。午後から相馬中村神社の祭礼風景・



相馬神社・中村城址・相馬市役所屋上からの市街地風景・富沢の宗兵衛堤を撮影して宇都宮に移動しました。19日(土)は、宇都宮から真岡市を経由して二宮町の蓮城院に到着、荒木住職の案内により境内の尊徳墓碑の撮影のほか、桜町陣屋の遠景、陣屋の内部、満開の桜が咲いている陣屋周囲の土堤風景などを撮影しました。

3 二宮町と二宮家は関係ある？

— 神奈川県にも栃木県にも「二宮町」がありますが、これは尊徳の「二宮」と関係があるのでしょうか？ —

まず神奈川県中郡の二宮町のほうですが、東海道線にも「二宮」という駅があって、東京のほうから尊徳生誕地を訪ねようと乗ってきた人が、この駅名でハッとと思って下車してしまうことが、時々あるようです。でも、ここから小田原市栢山の生誕地までは直線距離で10キロもあって、直接の関係はないのです。

しかし、この町には相模の国の二ノ宮である「川島神社」があります。二宮家の祖先は伊豆の伊東氏の流れとも、曾我氏の流れともいわれますが、室町末期に栢山の里に土着したとき、この神社にあや

かって「二宮」と称したのかもしれませんが。

それから、栃木県芳賀郡の二宮町のほうは、ズバリ尊徳に関係があります。

尊徳が最初に復興事業に成功した桜町領3カ村のうち、東沼村は真岡市に入り、物井村と横田村は物部村に入りましたが、この物部村が昭和29年に隣の久下田町・長沼町と町村合併で一つになるとき、尊徳にちなんで「二宮町」としたのです。関係町村議会の全会一致だったといえますから、うれしいですね。

4 お百姓にも苗字があった？

— 昔のお百姓には苗字がなかったと聞きましたが、金治郎の家に「二宮」という苗字があるのは、どうしてですか？ —

昔の農家でも、代々名主や組頭を務めてきたような、田舎の古い家には、たいてい苗字がありました。金治郎の家は分家の分家のまた分家ですが、本家の先祖は北条早雲のころにはもう栢山に住んで「二宮」を名乗っており、それがずーっと伝えられていたのです。しかし、公式にはこの苗字は使えませんでした。江戸時代の

初めに幕府が、士農工商にはつきり差別をつけて、農工商の庶民が苗字を使うのを禁止してしまっただけです。そして特別に功労のあった者にだけ、「苗字帯刀を差し許す」などと、もったいをつけていたわけですから「東」「西」「油屋」というような「屋号」で呼んだり、「万兵衛さんの家」「銀右衛門さんとか」というように呼び分けて、苗字の代りにしたものです。

そういうことで、尊徳も身分が農民であった間は、表向きには「栢山村金次郎」でした。表彰のときも、斗耕改良の感謝状のときもそうでした。しかし、私用の帳面類とか書状類とかには、早くからかなり大っぴらに「二宮金治郎」と署名してあるのは面白いことです。

二宮尊徳 Q & A

第9回 企画展

地階の企画展示室は、報徳をはじめ歴史・地誌その他一般的なテーマをそのつど企画展示します。前回(第8回)企画展は「数にとりくんだ尊徳」のタイトルで開催致しました。

企業経営と報徳

第9回企画展では、報徳を信条とする主な財界人をとりあげて、企業経営と報徳の関連をわかりやすく展示いたします。

日本の産業社会の成立と発展という視点から、産業化の発展にともなう企業経営の理念の変遷に注目すると、報徳思想の果たしている現代的な意義にも触れることとなります。

明治～大正の産業社会の確立期において、財界のリーダーたちは、企業経営にあたるに際して、報徳を次のように受けとめ、理解しました。(1)道徳と経済の一体化、(2)独立自営、自立心を養う、(3)克己禁欲、(4)誠心と勤勉力行、(5)分度ないし分限、(6)推譲(自譲は資本蓄積、他譲は労使協調・自他両全の道)、(7)感謝・報恩・奉仕・公益、(8)世のため人のため・国のため。

戦後においても、日本では私的な立場をこえた経営理念と行動が生き残り、高度化されたビッグビジネスの経営者の感覚の中に報徳に通ずるものを見いだすことができます。

昭和61年度 友の会会員募集

報徳博物館を身近なものとして気軽に利用しよう。報徳のことをはじめ、歴史や文化をグループで学ぼう。楽しいサークル活動をしよう。そしてこの館を盛り立ててやろう……。

そういった方々に会員になっていただくという趣旨です。会員になりますと、①博物館招待券の贈呈(1年間有効)②会報・パンフレット等の贈呈③研修室・講堂・閲覧室等の特別利用④館主催行事の案内⑤古文書等の受託管理、館売店の割引利用、などの特典があります。

会費は個人会員年間3,000円・法人会員10,000円で、受付事務は博物館で行います。財団法人報徳福運社(郵便振替口座・横浜3-49044)に入会申込みの会費振込みをされますと、会員登録の上、会員証をお届けすることになっています。

読者の広場

背中にたくさんのたきぎを背負い、本を読みながら歩いている姿。

小田原に住んで長い、今まで二宮尊徳というと、この印象位しか持っていなかった。

しかし、報徳博物館の中で見た彼は、実にたくさん業績を残した人なのだ。

数に取り組み、枘の改良を行なったり、当時全国的に荒廃していた土地を開拓し、農民に働く意欲をわかせる、窮乏していた諸藩の産業を振興させ、財政の再建につとめたことなど。

当時としては、まさに画期的な人だったのだ。しかも、それらの諸業の根底に流れるものは、人の心の開拓である。

きつと、人の心を豊かにすることが、彼の永遠のテーマだったのだろう。

利潤の追求だけを求め、エコノミックアニマルと酷評された現代日本。

このあたりで、先人の残した道を、今一度見直すべきではなからうか?

小田原市蓮正寺 O・M

◆事務局から

友の会だよりは年4回の発行です。会員の皆様のご意見やご感想、リクエストをお待ちしております。友の会事務局あてにお願いします。

報徳博物館友の会規則(抄)

1. この会は報徳博物館友の会という
2. この会の事務所は、小田原市南町1-5-72報徳博物館におく。
3. この会は、報徳博物館のすこやかな発展に協力し、身近な博物館に育てるとともに、これを活用して報徳の原理と方法をはじめ、わが国の歴史と文化をより深く、広く学ぶことを目的とする。
4. この会は、その目的を達するため次のことを行う。
 - (1)博物館への情報提供及び運営協力
 - (2)講座・講演会などの開催
 - (3)会員相互の研さん及び親ほく行事
 - (4)古文書等の寄託のあつせん

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替横浜3-49044